



## 医学図書館の利用者教育—現状と展望

坪内 政義

### I. 利用者教育の考え方

図書館業務のなかで、利用者教育は最も手がけにくい、あるいは図書館員が億劫になりがちなものといえるかもしれません。成果が数字に現われにくい、それでいて結構手間がかかる。これが理由のひとつでしょうか。

「MEDLINEや医中誌を知らないまま大学を出て医療現場にくる若い医師がいる」。ある時ある場所で聞いた病院図書室担当者の声です。医師を非難しているわけではありません。医学・医療に携わる以上使いこなして当然のデータベースに在学中接する機会を与えなかった大学、あるいは彼らに検索法を教えなかった医学図書館の姿勢を問うているのです。耳が痛い。ご承知のように、昨今では研究の場のみならず、診療現場でも文献情報が重要視されています。医師を養成する大学が文献調査法を教えていないとは！ 仮に大学や学部が認識しないのなら、図書館がその必要性を訴える。それは日頃から図書館が学生とどう向かい合っているかの証拠ともなる気がします。利用者教育は医用情報教育とイコールである。その観点から、今や医学図書館は医学教育の一端を担う立場にあっておかしくないといえるでしょう。

### II. 情報教育の担い方

図書館報やホームページでの広報をはじめ方

法はさまざまですが<sup>1)</sup>、一般的なものとして、レファレンス現場で利用者の要求に応じて行う個別指導と、プログラム化された講義・実習型の教育に大別しておきます。

人員、運用など様々な理由から利用者教育を業務に位置付けることが難しい図書館は、個別指導が精一杯でしょう。一方、業務のひとつとして位置付け、独自に講習会などを開いたり、大学のカリキュラムのなかで文献情報に関する講義を担当している図書館があるのも確かです<sup>2)</sup>。

どちらも重要ですが、業務として十分プログラム化されているとはいえ個別指導がもっぱらであるが、幸いカリキュラムにおいて情報教育に関わる機会を与えられている、つまりふたつの担い方の中間にある大学図書館の実例として愛知医科大学の現状を紹介します。なお、現在利用者教育の中心となっているのは、CD-ROMやインターネットによる文献検索指導と思われるので、MEDLINEや医学中央雑誌（以下、医中誌）などのデータベース利用指導に焦点をあてていることをお断りします。

### III. レファレンスの現場から

本学ではMEDLINE、CINAHL、医中誌CD-ROMが学内ネットワークで提供されており、情報コンセントさえあれば学内どこからでも検索できます。もちろんインターネットも同じ環境で利用が可能ですから、PubMedやIGM (Internet Greatful Med) も同様です。従って、図書館設置の端末を利用する人は数が限られ、図

つほうち まさよし：愛知医科大学  
医学情報センター（図書館）  
mtsubo@aichi-med-u.ac.jp

書館員は検索の実際をすべて把握しているわけではありません。それでもレファレンスカウンターには時折「教えてください」の声がかかる。この場合、意外に多いのが、パソコンの基本操作で戸惑っているケースです。これは学生、医師、教員共通です。学生は取りも直さず、医師、研究者だからといって誰もがパソコンに習熟しているとは限らない。ワープロはともかく、ブラウザといわれても何のこともやらわからないという人もいます。パソコン必需品の時代なのだからそれは個人の問題、と片づけてよいでしょうか。しかし、この件は不問ということにしておきましょう。

質問の次の段階。文献を表示させるにはどのキーを押すのか、といった検索機能に関する具体的な質問です。さすがにこの手の質問がもつとも多い。この機会に完璧に覚えてくれることを願いつつ丁寧に教えます。このような時、本来ならばデータベースの成り立ち、キーワードの選び方、論理の立て方など基本的な検索の考え方・戦略にまで突っ込んで指導するのが望ましい。根本的な事柄は長く記憶に残るものですし、特に必要に迫られて聞いたことはなおさらでしょう。ところが残念なことに、利用者が必要に迫られている時は急いでいる時でもあることが多いのです。となればじっくり時間をかけるわけにもいかない。そこでどうしても、一度は体系的な指導・教育が欠かせないと思わざる

を得ないのです。

#### Ⅳ. カリキュラムにおける情報教育

現在、医学部では従来の一方通行の講義以外に、セミナー形式の授業が実施されています。例えば、本学には小人数の学生を対象に行う基礎科学、基礎医学、臨床医学各セミナーがあり、そこでは教員の指導や助言のもとに学生が自ら設定したテーマについて探求していきます。その過程で情報を収集、選択する必要が生じ、自ずとMEDLINEや医中誌に接していきます。また、その他通常の講義や実習でもレポートが課されることがありますが、その際文献検索が義務づけられることが多いようです。こんなときは図書館の利用者端末が同じ文献を探す学生で満員盛況となります。われわれがひたすら検索指導に追われる一時です。

これらは文献検索が学習の過程で自ずと必要になる場合ですが、ほかに文献検索を含む情報教育そのものが目的の履修科目も組まれています。それが「医用情報学」です。本学には医学部と看護学部がありますが、どちらにも同様の授業が用意されています（看護学部の科目名は「情報科学」）。コンピュータを活用する基礎的な能力を身につけることから始めて、大学の情報環境を利用しながら医学・医療・看護学分野における応用法を学ぶ。このなかには医学情報センター（図書館）の利用法も含まれてい

表1. 愛知医科大学医学部平成12年度医用情報学授業計画

学年	学期	時間	内 容	学期	時間	内 容			
1年	前期 4月～9月	90分	ハードウェアの紹介	後期 10月～3月	90分	医学教育とコンピュータ(オンライン教材の利用法)			
		90分	オペレーティングシステム		90分	医学研究とコンピュータ(MEDLINE、PubMed)			
		90分	学内メールシステム その1		90分	医学研究とコンピュータ(データベース検索)			
		90分	学内メールシステム その2		90分	医学研究とインターネット			
		90分	コンピュータによる文書作成、作図		90分	医学情報とプレゼンテーション技術 その2			
		90分	インターネット(Eメール その1)		90分	解剖学とコンピュータ・医用画像処理			
		90分	インターネット(Eメール その2)		90分	表計算ソフト(入門)			
		90分	インターネット(電子掲示板、電子会議等の体験)		90分	表計算ソフト(医用グラフの作成)			
		90分	医学情報センター利用法		90分	表計算ソフト(医用統計処理への応用 その1)			
		90分	医学情報とプレゼンテーション技術 その1		90分	表計算ソフト(医用統計処理への応用 その2)			
		90分	インターネット(WWW)		90分	SAS(情報分析ソフトウェア)入門			
		90分	インターネット(HTML入門)		90分	SAS(情報分析ソフトウェア)応用 その1			
		90分	インターネット(ホームページの作成)		90分	SAS(情報分析ソフトウェア)応用 その2			
		90分	インターネット(ホームページ用画像作成)		90分	医療とコンピュータ(遠隔医療、在宅医療支援)			
		90分	医学用CAIシステムの紹介		90分	医療とコンピュータ(病院情報システム)			
						定期試験			定期試験

ます。

内容に多少の違いはあるものの、日本の医科大学のほとんどがこの種の講義を必修としていると聞きます。本学の場合、看護学部は必修ですが、医学部は1年生の選択科目となっています。ただし、1学年100人中履修登録学生はほぼ100%、単位取得学生は75%。関心とやる気の高さがうかがえます。

表1に示したのが、医学部の平成12年度医用情報学授業計画です。このなかで図書館利用と直接関わっているのが、前期に行われる「医学情報センター利用法」と後期に行われる「医学教育とコンピュータ」「医学研究とコンピュータ」の2コマです。これら1時限90分4週の講義および実習では、MEDLINE、医中誌、その他のデータベース、さらに各種マルチメディア教材の講義と演習が行われ、その後与えられたテーマについて適当なデータベースから情報を収集し、結果をプレゼンテーションソフトを利用して発表するところまで行います。

このように様々なデータベースとその検索法に在学中から触れておけば、医師・研究者となってから文献収集の本格的な作業に抵抗なく取りかかれるでしょう。情報の電子化が加速度的に進む現在、この科目は例外なく必修にすべきと思われます。

さて、ここでわれわれが注意を払いたいのは、これらの講義・実習に図書館員がどれだけ関わっているかということです。同様の授業を図書館員が担当している例は先に参考文献としてあげましたが、多くの大学ではまだそこまで至っていないと思われます。理由の多くは、情報学担当教員と図書館員とのあいだの意思疎通が欠けている、あるいは単位認定において教員資格を持たないものが講義を担当することに問題があるとの判断によります。本学では担当教員の理解を得て「医学情報センター利用法」を図書館員が担当します。ここでは文献検索のみならず、図書館を利用する際に必要な知識すべてを盛り込むので、特定の指導に多く時間を割くこ

とはできません。10年ほど前から本学看護専門学校2年生2クラスを対象に、5時限(1時限90分)ずつ文献検索の講義と図書館での実習を図書館員が行っていますので経験は積んでいるのですが。

それでも、医学部の正規カリキュラムのなかで、図書館利用について指導・教育する機会を与えられたのは大きな進歩に違いありません。

(※投稿後、「医学研究とコンピュータ」2コマも図書館員が担当することになりました。)

## V. 今後のあり方—大学と病院の協力関係において

ここまで述べてきて、今後の利用者教育のあり方について方向が自ずと見えてきたように思います。

現場での個別指導がもっともダイレクトであるのはいうまでもありません。しかしこれは自ら求める人が対象です。方法はともかく何を利用すればよいかはわかっているわけですから、ある程度の認識は備わっています。一方、困ったとき図書館が頭に浮かばない人がいるとしたら、こちらから前もってインプットしておかなくてはなりません。広報をとおして要望を把握し、利用者教育を展開する。その際、学生に対しては、図書館独自の講習会のみならず、意識付けのうえで利用者教育をカリキュラムに組み込むのがもっとも有効と思います。そして図書館員が講師となる。専門職としてこれがあるべき姿でしょう。教員や教務部の理解と協力を得ることが必要です。もちろん、講師を務めるために知識や技術(プレゼンテーション技法も含めて)を磨かなくてはならないのはいうまでもありません。

病院図書室は、診療支援に重点が置かれています。業務には迅速さが要求され、極めて多忙と推察します。利用者教育に時間を割くのは容易ではないでしょう。組織を介して、あるいは単独でも、協力関係を築くうえで大学図書館は病院図書室をどのように支援できるかと模索が

続けられています。相互貸借や研修会以外にも、目立たない地道な支援があるはずで。情報へのアクセスの仕方、図書・雑誌の知識、書誌事項の読み方等等、学生あるいは研修医に対して図書館利用の基本をみっちり訓練すれば、それが引いては病院図書室の仕事によいかたちで反映されるでしょう。

地味だけれども重要な支援、それが利用者教育であると考えています。

### 参考文献

- 1) 市古みどり. 医学図書館のレファレンスサービス. 日本医学図書館協会継続教育コーステキスト. 東京: 日本医学図書館協会; 1998. p. 26-27.
- 2) 特集「教育サービスの新展開」. 医学図書館. 1997;44(3):296-336.
- 3) 小澤ゆかり. 基礎医学特論授業を終えて. きたさとニュース. 2000;No. 233:5-7.

### 第7回医学図書館員基礎研修会のお知らせ

主催 日本医学図書館協会  
後援 文部省(予定)  
テーマ 「医学図書館での仕事にすぐに役立つ基礎知識—初心者とベテランのリフレッシュのために—」  
期間 2000年8月23日(水)～8月25日(金)  
会場 埼玉県立大学研究研修センター  
研修ホール

第1日 8月23日(水)  
9:30～10:00 受付  
開会式・ガイダンス・参加者自己紹介  
講義1: 医学図書館とJMLA  
講師: 殿崎正明氏(日医)  
講義2: 図書1(図書の収集・受入、蔵書構築)  
講師: 押田いく子氏(東邦)  
講義3: 図書2(書誌データを利用した分類・目録作業)  
講師: 井口史子氏(帝京)  
討論1: 日常業務での疑問点について解決策を考える(図書)  
講義4: 図書の補修  
講師: 遠藤武夫氏  
(ナカバヤシ株式会社兵庫工場長)  
講演1: 「基礎医学研究者から図書館に期待するもの」  
講師: 林 盛昭氏  
(埼玉県立大学保健医療福祉学部教授)  
18:00～ 懇親会

第2日 8月24日(木)  
9:30～10:00 受付  
講義5: 雑誌1(雑誌業務の流れ)  
講師: 長谷川豊祐氏(鶴歯)  
講義6: 雑誌2(外国雑誌の価格問題)  
講師: 長谷川豊祐氏(鶴歯)  
講義7: 雑誌3(電子雑誌とリンク)  
講師: 長谷川豊祐氏(鶴歯)  
討論2: 日常業務での疑問点について解決策を考える(雑誌)  
講義8: 医学図書館の常識用語  
講師: 有田正子氏(杏林)  
15:20～16:50 見学: 埼玉県立大学図書館

第3日 8月25日(金)  
9:30～10:00 受付  
講義9: 参考業務  
講師: 阿部信一氏(慈恵)  
講義10: インターネット  
講師: 奥出麻里氏(川鉄)  
講義11: 相互貸借  
講師: 小川弓子氏(帝京)  
講演2: 「自己研鑽の方法と専門性の磨き方」  
講師: 川村敬一氏(獨協)  
14:10～15:00 まとめ・アンケート記入  
修了証書授与・閉会式